2022年11月6日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神の言葉の前に共に

［ネヘミヤ7章72b～8章12節］

第七の月になり、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。彼らは書記官エズラに主がイスラエルに授けられたモーセの律法の書を持って来るように求めた。祭司エズラは律法を会衆の前に持って来た。そこには、男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日のことであった。彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた。書記官エズラは、このために用意された木の壇の上に立ち、その右にマティトヤ、シェマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤ、マアセヤが、左にペダヤ、ミシャエル、マルキヤ、ハシュム、ハシュバダナ、ゼカルヤ、メシュラムが立った。エズラは人々より高い所にいたので、皆が見守る中でその書を開いた。彼が書を開くと民は皆、立ち上がった。エズラが大いなる神、主をたたえると民は皆、両手を挙げて、「アーメン、アーメン」と唱和し、ひざまずき、顔を地に伏せて、主を礼拝した。次いで、イエシュア、バニ、シェレブヤ、ヤミン、アクブ、シャベタイ、ホディヤ、マアセヤ、ケリタ、アザルヤ、ヨザバド、ハナン、ペラヤというレビ人がその律法を民に説明したが、その間民は立っていた。彼らは神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した。

総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは、律法の説明に当たったレビ人と共に、民全員に言った。「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。」民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。彼らは更に言った。「行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」レビ人も民全員を静かにさせた。「静かにしなさい。今日は聖なる日だ。悲しんではならない。」民は皆、帰って、食べたり飲んだりし、備えのない者と分かち合い、大いに喜び祝った。教えられたことを理解したからである。

[１] 主を喜ぶことは

11月に入って最初の日曜日になりました。今月は来週・再来週と特別な礼拝が続きます。そして第四週になるともうアドベント第一週（クリスマス前の4週間の始まりの日）に入ります。そこで今日は、「ネヘミヤ記」のクライマックスと言っても良い8章をご一緒に見てゆきたいと思います。今日読んで頂いた御言葉の中で、とても有名な言葉があります。その言葉を今日はまた心に刻んで、この会堂からご自分の生活の場所へと戻って頂ければと思っています。それは8章10節の言葉です。―「主を喜び祝うことこそ、あなた方の力の源である」。（口語訳では「主を喜ぶことはあなた方の力です」）

今日の「招きの聖句」では、フィリピの信徒への手紙の中から、次の言葉を読んで頂きました。―「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」と。いずれも「喜び」への招きですね。けれどもこれは一般的な喜びとは違いますね。「主を」喜ぶこととか「主において」常に喜びなさいと言っています。

今日のネヘミヤ記の聖書の箇所は、破壊されてしまったエルサレムの城壁が、バビロン捕囚後、ユダヤ人たちによってもう一度築き直すという大工事を行い、遂にその工事が終了し、大勢の民が広場に集まった際に喜びに満ちた礼拝を捧げたという記事です。その時にその中心にいたネヘミヤ、また祭司エズラ、またレビ人らが民に語った言葉として記されています。これまでの章もお読み頂くと、この「城壁再建」ということは決して簡単なことではなかったということが分かります。妨害する者もいたり、内側でも皆が積極的に関わっていたかと言うとどうもそうでもない。私は、この時のユダヤ人たちはかなりそれぞれの心に温度差があったに違いないと思います。バビロン捕囚は約70年ほどの期間ありました。世代も変わってくる。人間は良くも悪くも「慣れる動物」ですから、身についてしまった生活から、違うことに着手するということは簡単ではなかったことだと思います。言ってみれば、ユダヤ人たちが失ったものは「神殿」や「城壁」であるよりもその時の推移の中で、神様との関係に生きる喜びや信仰のともしびが消えかかっていたのではないかと思います。ある意味、平凡な生活、安泰な生活というのは、「これでもいいんじゃない？」ということになると思います。

そういう中で、今日ネヘミヤやエズラは「主を喜び祝うことこそあなた方の力の源です」と、信仰生活の大動脈と言いますか、温泉のようなものを掘り当てると言いますか、熱く脈打った場所へと私たちを招いているように思うのです。

［2］不信仰な私たちに語り、招いておられる

　ネヘミヤ記6章15節を見ると、こうあります。「城壁は五十二日かかって、エルルの月の二十五日に完成した」。でその後お祝いを行ったとは書いてありません。エルルの月というのは、ユダヤの暦では第六の月（太陽暦の8月から9月）です。そして7章には、帰還した人々の部族ごとの名簿と言いますか人数がずらっと書かれています。7章の最後の部分には「イスラエル人は皆それぞれ自分たちの町に住んだ」となっています。もう新しい生活に移行しています。しかし今日の所です。新しい月になりました。ここで行ったことが重要な意味を持ちます。第７の月。しかも一日です。この日はどういう日かと言いますと、レビ記の23章24節にこうあります。「第７の月の一日は安息の日として守り、角笛を吹き鳴らして記念し、聖なる集会の日としなさい。あなたたちはいかなる仕事もしてはならない」。この安息日から新年が始まると言っても良い。ネヘミヤ記の8章1節以下。

「民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。彼らは書記官エズラに主がイスラエルに授けられたモーセの律法の書を持って来るように求めた。祭司エズラは律法を会衆の前に持って来た。そこには、男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日のことであった。彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた。」―集まっている者たちは共に「御言葉」を聞いたのですね。そのことをこそ求めた。目に見える城壁は完成した。単なる工事であればこれで終わりです。しかし、それでは大事なものが欠けている。ここで、神様の言葉を聴かなければ！自分たちが何者であるかを神様に教えて頂かなければ！そのことにおいては、今、彼らは一つになって礼拝を捧げているのです。

　ここで現れたのが、書記官であり祭司であるエズラです。彼はイスラエルの原点・神様からの愛の言葉である「律法の書」を、神殿の前、水の門の前にある広場に集まっている者たちに夜明けから昼まで読み上げたとあります。5節を見ると、エズラが読み始めると、集まった者たちは立ち上がって、両手を挙げて「アーメン、アーメン」と唱和し、跪き、顔を地に伏せて主を礼拝したとあります。目に浮かんできます。あぁ、これが神様の前に出るということなのだなと思います。

　その後、レビ人たちがその律法の書を説明したとあります。恐らく当時のアラム語に翻訳したということと、その元々の律法の精神を説いたのでしょう。「み言葉の解きあかし」がなされているのです。人々はそれを理解したとあります。理解して何が心の中に起こったかと言うと、これはとてもリアルだと思います。あぁ、感謝だ！良かった！ではないのです。これまでの自分たちの不信仰が突きつけられ、嘆きや涙が出てきたというのです。しかしそこでネヘミヤやエズラ、またレビ人たちは彼らに何と言ったのか。9節の後半からお読みします。

　「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。」民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。彼らは更に言った。「行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」レビ人も民全員を静かにさせた。「静かにしなさい。今日は聖なる日だ。悲しんではならない。」

礼拝で御言葉を聞き、自分の罪の姿が示されること、それは恵みです。それは神様からの招きだからです。神様は私たちを放っておかない。私たちに、あなたに、目をかけておられるのです。それは嬉しいことです。だから嘆いても良いのです。神様の前に嘆く。しかし、神様は私たちを嘆いたままにはしておかれません。「今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」。―この言葉に対して私たちは「アーメン。私たちはあなたを喜びとします」と言えると思います。何故なら、主はまるごとの私たちを愛して下さっている方ですから！不信仰を責めているのではないのです。むしろ不信仰な私たちを招き、造り変えようと礼拝のたびごとに私たちに近づき、私の言葉に根をしっかり降ろして歩んで行けば良い、私自身を喜びとして生きていってほしい、と仰っているのではないでしょうか？

［3］主イエスの命につなげられて

　今日はこれから主の晩餐式を執り行います。これは天の食卓の地上版とも言って良いものです。そうです、私たちは信仰においてイエス・キリストの命を頂いています。先ほどの言葉の中に「行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい」とありました。まるで主イエスの言葉のようです。「これはわたしの体だ。食べよ。これは私の血液だ。飲みなさい」と。私たちはこの肉体が滅びても、主の十字架と復活の故に、そのイエス様に繋がる命の中に導かれていくのですね。イエスを主と告白した時から既に、その命が―悲嘆にくれる命ではなく、主を喜ぶ命が―始まっているのです。

神様は生きておられますから、私たちに御言葉を持って語りかけられるのです。御言葉を聞いて「え？イエス様、私にいまそんなことを言われるの？」という時の方がもしかしたら大事な時なのかもしれません。旧約のイスラエルは、苦難を通してもう一度神様を喜ぶことへと招かれたのです。私たちも様々につらい状況に置かれることがあると思います。しかし、イエス様の十字架の及ばない場所はないのですね。ですから「あなたがたは主において喜びなさい」。そう、主において、です。喜びの源であるお方は、片時も私たちから離れないために、人となって来て下さった「神の言葉」です。この方の語りかけをご一緒に聴きながら、「アーメン、アーメン」と、礼拝の民としてこの地上を歩んで行きたいと思います。

お祈り致します。

愛する主よ、「主を喜び祝うことこそ、あなた方の力の源である」との御言葉を、今日の私たちに新しく受け止め、アーメン！と言わせて頂けますように。共にあなたを礼拝する生活を人生の真ん中に置き、常に再出発をすることが出来るよう、聖霊を注いで下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。